

Langacker による主観性に関する 視点構図への批判的検討

井原 奉明

A Critical Study of the Viewing Arrangement on Subjectivity by R. W. Langacker

Tomoaki Ihara

Abstract

This paper first reviews the cognitive models of viewing arrangement by Ronald W. Langacker and then tries to examine the appropriateness of the models as theoretical framework for subjectivity by giving them a critical consideration. Consequently the author demonstrates the inadequacy of the models, showing the supremacy of alternative theories such as Ikegami's subjective- and objective construals and Nakamura's I- and D-models. Finally the author raises the fundamental problem of subjectivity or self, which lies in all the cognitive models mentioned in this paper, and suggests a clue to work it out.

Ronald W. Langacker は、主観性¹が自然言語の文法構造に広くみられる現象であり根本的な研究課題であるとし、Langacker (1985) において認知言語学の観点から原型のかつ基本的な理論的モデル（彼は視点構図と呼んでいる）を提示した。その後、細部において若干の変更が加わった点があるが、実質的な部分では Langacker (1985) の枠組みは維持されており、認知言語学において主観性の問題に取り組む者が参照すべき基本として、その後の議論・研究において取り上げられ続けている。

本稿は、Langacker (1985) に基づき主観性に関する彼のモデルと論考をまとめ、その後でその問題点を検討するものである。

1. Langacker (1985) の視点構図

Langacker は、人が知覚する時の状況に基づいて観察者 (observer) と観察されるもの (the observed entity) とを区別し、両者間の非対称性に従って以下に示す 2 種の視点構図を区別する。

下の図 1 (a) で示される構図は、標準的視点構図 (optimal viewing arrangement) と呼ばれる。この構図においては、S で示される観察者と O で示される観察されるもの²との非対称性が最大になっている。S は O と完全に区別されていて、点線で示された客観的場面（知覚において注意の焦点が当て

図 1³

られている範囲のこと。オンステージとも呼ばれる。本稿ではこの後、オンステージを使う)にS自身は含まれず、Oだけが対象化されている。つまり、Sが観察しているのはOであり、Oを観察しているS自身は対象化されていない。このような構図において、Sは最大限に主観化されており、Oは最大限に客観化されているといえる。S自身がオンステージに含まれず最大限に主観化された場合、Sは自己をまったく対象化せずに主体としてのみ機能している。この場合、自己意識はまったく持っていない。

それに対し、図1(b)で示される構図は、自己中心的構図(egocentric viewing arrangement)と呼ばれる。この構図において、オンステージはS自身を含む範囲にまで拡大されている。Sは単なる観察者ではなく、観察されるものでもある。従って、Sが主観化される程度は弱まっており、Sは(程度は様々だが)自己意識を持つといえる。

次に、Langackerは知覚状況に基づくこのような視点構図を概念化・言語化に応用する。私たちが言語を使う際、私たちは知覚状況に基づく観察主体(認知主体)であると同時に状況を概念化する主体でもあり、そのような状況をどのような言語で表現するかを選択・決定する主体でもあり、さらにそのような言語表現を音声化する話者としての役割も持つ。Langackerは、先のSを認知主体だけでなく、概念化・言語化主体、話者とみなし、上述の2種の構図を検討する。

図1(a)は、Sが自己意識を持たずにOを概念化・言語化する状況に対応する。この場合、Sは概念化・言語化する者としてのみ機能する。一方、図1(b)においてSは概念化・言語化する者であると同時に概念化・言語化される者でもある。

Sは最も狭い意味で話者を指すが、話者と聞き手が共通の概念化を行う場合もある。その場合Sは広い意味で言語行為に参加している者たちを指す。広い意味で言語行為に参加する者たちを含めた名称として、LangackerはG(ground)という用語を導入する。

概念化・言語化を考慮に入れると、図1は不十分であり、以下の3種の図が適切である。

大きな四角は概念化・言語化されことばに表現される範囲(知覚状況において焦点の当てられた対象や関係の背景となる部分。ベースともいう。本稿ではこの後、ベースを使う)である。図2(a)の場合、スピーチアクトに参加するGはベースの外にある。これは、焦点を当てられている当の対象(太字の丸をプロフィールともいう。本稿ではこの後、プロフィールを使う)の意味⁴がGを参照することなく確定できるということである。Langackerによれば、普通名詞の多くは直示的でなく、Gを参照点としなくてもGの参与者たちは言語的意味を共有することができる。例としてはelbow, antelope, desk等が挙げられる。つまり、<elbow>というものをプロフィールし、elbowという語を使う場合、その視点構図は図2(a)で示される通りであり、Gは最大限に主観化されている。

それに対し、図2(b)および図2(c)の場合、Gはベースの内にある。Gは、言語化以前の概念化の段階において何らかの参照点として機能している。このような構図で把握された言語表現は直示

的なものである。

図2 (b) から検討する。図2 (b) においてGはオンステージの外(オフステージという)に位置しているけれども、言語表現の意味に関してはGが参照点として関与している。図2 (a) と図2 (b) の違いは以下の例文で明らかにされる。

(1) a. Tuesday is the second day of the week.

b. Tuesday was hectic.

(Langacker 1985: 113)

例文(1) aにおいてTuesdayという語は、いつ、どこで、誰が発話したかに関わりなく言語的意味を確定できるので非直示的な表現である。一方、例文(1) bにおけるTuesdayは、いつ、どこで、誰が発話したかが不明だと言語的意味を確定できない。よって直示的な表現である。この違いは、図2 (a) と図2 (b) のそれぞれにおけるGの位置の違いによって示されている。つまり、図2 (a) が非直示的、図2 (b) が直示的であることは、図2 (a) においてGがベース外に位置していること、図2 (b) においてはベース内にあることによって示されている。

図2 (b) においてGはベース内にあるがオンステージの中には位置していない。ということは、言語表現上、非明示的であるということである。一方、図2 (c) においてGはプロフィールと一致しており、概念化・言語化主体が、概念化・言語化される対象そのものであることを示している。図2 (c) においてGはベース内にあるばかりか、オンステージに位置している。つまり、Gの主観性は最小限になり、客観性が最大になっている。このような例はIという一人称代名詞である。

図2 (b) では、オフステージに位置するGがオンステージに位置するプロフィールを概念化・言語化するわけだが、Langackerはさらに、2種の特別な場合を検討する。2種の構造は、以下の通りである。

図3 (a) の構造は概念的な displacement と呼ばれる。現実のGは概念化・言語化主体でありながらプロフィールされてもいる。このような場合、Gは、現実のG位置とは異なる視座(vantage point) G' に displace し、G' からGを記述する。ここでG' がオフステージに位置している点に注意しておくこととする。

このような displacement において、自己は他者のように特徴づけられ、三人称を使って記述される。Langackerは次のような3つの文を例に挙げ、(a) の例文が displacement であるという。

(2) a. The person uttering this sentence doesn't really know.

b. I don't really know.

c. Don't really know.

(Langacker 1985: 126)

この例文 (2) a の場合, I のような一人称代名詞を使って直接, 明確に概念化・言語化主体, 話者を指示するのではない。displacement では, 自身を指す表現に他者を表す時の三人称が使われ, 文法的にも三人称の形式をとる。Langacker は別の例文も挙げている。

- (3) a. Don't lie to me!
b. Don't lie to your mother! (Langacker 1985: 127)

この例文 (3) b では子どもの母親が G である。母親は, オフステージに位置する G' (この場合は当の母親の子供の視座) から自身を他者のように把握し, 客観的に記述している。⁷

図 3 (a) で示される displacement においては, 繰り返しになるが, プロファイルされるのは現実の世界に位置する G である。G は想像世界において G' の視座に分裂した自分を立たせ, 自身である G を眺める。一方, 図 3 (b) で示される構図は, cross-world identification と呼ばれる。図 3 (a) との違いは, G と G' の位置である。図 3 (b) において G はオフステージにあり, プロファイルされるのは G' である。displacement と cross-world identification は G と G' の位置が正反対なのである。cross-world identification の典型的な例は以下の文で示される。

- (4) That's me in the middle of the top row. (Langacker 1985: 129)

この例文 (4) は, 写真に写っている自分を見て発話されたものである。G 位置にいる現実の自分が G' 位置にある写真上の自分の姿を捉えているのである。

これまでの議論は, プロファイルが対象 (モノ) の場合であった。ここまでの議論の中で, 自己をプロファイルする場合を整理しておく, 概念化・言語化主体とプロファイルが一致しているのが図 2 (c) であり, 一人称代名詞により自己を指示する構図である。それに対して, 概念化・言語化主体である G とプロファイルされた自己 G' が分離しているのが図 3 (a) と図 3 (b) である。図 3 (a) の場合は, G' がオフステージに位置し, オンステージに位置する現実の G を把握する構図であって, この場合, 自己を他者化し, 三人称表現を使って捉える。図 3 (b) の場合は, 現実の G がオフステージに位置し, プロファイルされた G' を把握する構図である。この場合, 図 2 (c) のような典型的な一人称代名詞の用法ではないが, 一人称代名詞を明示的に使うことが適当である。(Langacker 1985: 129 参照)

次に, 対象でなく関係を概念化・言語化する場合を検討する。Langacker は以下の図を基本として示している。

図 4 (a) は, 自己中心的視点構図によって関係をプロファイルしたものである。関係をプロファイルする場合, 関係とそれを構成する要素もプロファイルされる。つまり, 図 4 (a) においては, 「G」

と「Gと異なる客観的对象」および「その間の関係」がプロファイルされる。Gは認知主体であると同時に認知される客観的对象でもある。それに対して、図4(c)において、Gは認知主体としてオンステージの中に位置する客観的对象をプロファイルする、自身はオフステージに位置している。ただ、概念化・言語化する場合の参照点として関与するのでベースの中には存在している。⁹

図4(a)と図4(c)のそれぞれに特徴的な言語表現は、図4(a)がnear meやidentified to usであり、図4(c)がthis(に代表される指示詞)である。図4(a)では、G自身もオンステージに位置しているので言語表現上、明示化される一方、図4(c)では、Gがオフステージにあることから、参照点としてG自身が機能するとしても言語表現の上で明示化されない。

図4(a)の変形として考えられるのが以下の図で示される2種の構図である。

図5(a)は、GとG以外の客観的对象および両者の関係がプロファイルされており、オンステージ上に位置している。Gは、仮想上のG'を視座とし、自己中心的視点構図を取る。これは一種のdisplacementであるが、図3(a)のdisplacementとは、G'の位置が異なっている。先にみた図3(a)ではG'の位置がオフステージにあったのに対し、図5(a)ではG'がオンステージに位置づけられている。Langackerはこの違いについて、前者を根本的なdisplacement、後者を穏健なdisplacementと呼んでいる。前者の場合、G'がオフステージにあることから自己自身を他者として捉え、Gに言及する際に三人称表現を使うのに対し、後者の場合は、G'がオンステージにあることから自己自身を一人称表現で表すのである。

後者を説明するためにLangackerが使う有名な例は以下の通りである。

- (5) a. Ed Klima is sitting across the table from me!
b. Ed Klima is sitting across the table! (Langacker 1985: 140)

例文(5)aが、穏健なdisplacementの構図によって事態把握され、言語化された発話である。自己は概念化・言語化する主体であると同時に概念化・言語化される客観的对象でもあるので、言語表現上、明示的に表される。この場合、一人称代名詞が使われる。

図5に戻る。図5(b)は、図5(a)で生じたdisplacementがゼロであること、つまりGとG'が一致していることを示している。この構図はLangackerによって極端ではあるが一種のdisplacementであるとみなされている。概念化・言語化主体であるGは自らが現実に位置しているところを視座とするので、自身は客観的对象化されず、言語表現上、明示的に表現されない。Langackerはこのような場合をimplicit mention (of the speaker) もしくはno-mention (of the speaker) と呼ぶ。上述の例文(5)bは、implicit mentionの例と考えることができる。

自己と客観的対象および両者の関係をプロファイルする場合、特に自己のプロファイルが関わってくる場合をまとめてみると、図4(a)のように、GがG自身と客観的対象および両者の関係をプロファイルする場合には、自己は一人称代名詞で言語表現上、明示される。図5(a)のように穏健な displacement の場合にも、Gは自己自身を客観化し一人称代名詞を使って指示される。最後に図5(b)の場合、Gは主観化されており、自己自身は言語表現上、明示されない。

2. Langacker による視点構図の問題

ここまで主観性に関する Langacker による視点構図理論をみてきた。特に、自己はいかに言語表現されるか、されないかの観点から、彼がその違いの根拠とする視点構図を検討してきた。この節においては、Langacker の議論における問題点を以下の通り7点指摘する。

- 問題点1 主客二元論に基づく Langacker の知覚モデルは適切か
- 問題点2 一人称のゼロ形は displacement がゼロとってよいのか
- 問題点3 概念化・言語化主体を言語表現上、明示するかどうかは単なる共時的対立なのか
- 問題点4 Gの〈場所〉化をどのように考えるのか
- 問題点5 一人称ゼロ形の意味はカジュアル、インフォーマルなのか
- 問題点6 役割名称や固有名詞は三人称なのか
- 問題点7 再帰代名詞を考察すべきではないか

以下、一つひとつの問題点を検討する。

問題点1 主客二元論に基づく Langacker の知覚モデルは適切か

Langacker は、自らの議論を知覚の有り様に基礎づけているが、伝統的な主客二元論を安易に利用しているように考えられる。デカルト以降、主客二元論が多くの難問を引き起こすことはよく知られているし、知覚の哲学において実在論的な主客二元論は知覚の有り様を説明しきれない。¹¹メルロ＝ポンティは、知覚の現象学を論じた際に、実験心理学が依拠する経験論も観念論的な主知主義も主客二元論の図式を前提としており、いずれもが問題点を抱えていることを明らかにした。そして、主客二元論に収まりきれない身体の両義性を強調し、〈生きられる世界〉への注目を通じて主客二元論の克服を図ろうとしたことはよく知られている。

Langacker の基本的な考え方は、実在論的に主体と客体があらかじめ存在し、主体が客体に認知作用を働きかけ、主体が認知イメージを持つ、というものである。その考え方を認知言語学の立場から中村(2009)が批判している。中村の考えは、「ヒトとしての身体を有する私たち認知主体となんらかの対象(や環境)とのインタラクションに基づいて対象の像(認知像)が形成され、世界が立ち現れる」(中村 2009: 358)ことが認知の本質だというものである。中村は、Langacker の視点構図が主客二元論的な「観る・観られ関係に基づいている」(中村 2009: 358)ことを指摘し、「私たちの認識は、いわゆる客観的に存在するものを単純に外側から観ているのではなく、観る・観られ関係に基づいてはいない」(中村 2009: 358)と述べる。私たちが眺めている対象は、いわゆる生の対象^{なま}なのではなく、私たちが認知能力や認知プロセスに基づいて対象に働きかけ、インタラクションの結果形成されたものである。だとすると、「私たちが、客観的に存在する対象に対峙するということが不可能で

あ」(中村 2009: 360) るし、認知主体も「客観的存在ではなく、認知的に捉えられたものであ」(中村 2009: 360) る。だからこそ、認知の基盤は「主客未分のインタラクション」(中村 2009: 361) にあり、主客対峙という図式では説明し得ない。¹² この考え方は、中村自身述べているように、現代の現象学でも、身体論、量子力学においても認められている考え方であり、言語現象を考察するのにも妥当な立場であるといえる。

同様に、池上(2011)も認知の有り様が身体を通じた相互作用であると主張する。池上は Langacker の構図とは異なる、主観的把握と客観的把握という2種の事態把握の基本類型を提示する。¹³ 池上によると、主観的把握は、「話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする―実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする」(池上 2011: 52) と特徴づけられる。それに対して客観的把握は、「話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする―実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に(自己の分身を含む)事態を把握する」(池上 2011: 52) という特徴を持つ。¹⁴ 池上にとって、客体とは事態のことに他ならない。主体が客体たる事態に関わり合うとは、「<体験的>に(あるいは、自らの<身体>を介して感覚レベルで)関わり合うこと」(池上 2011: 52)、つまり「主体が自らの身体性をもって直接事態に関わり合う」(池上 2011: 52) ことだと池上は考える。主観的把握と呼ばれる認知図式において、主体は事態の中に埋め込まれており、身体を通して直接関わり合う。このような様態は、池上によって「主客合一」(池上 2011: 51) であるとされる。

生態心理学における<環境に埋め込まれた自己>という概念も主客二元論の枠には収まりきれないものである。たとえば、「京都がだんだん近づいてくる」という概念化・言語化は、環境の中で自身が動くときに自己において起こっている変化が、認知される環境の変化(環境において起こっていると思われる変化)と捉えられることを示している。このような概念化・言語化の認知プロセスにおいて、自己と環境は主客として対立しているのではない。自己は環境に埋め込まれる形で両者がいわば一体化している。自己の変化は環境において起こっている変化とも捉えられるし、環境の変化は自己において起こっている変化とも捉えられるのである。

このような主客の曖昧さは、たとえば「雨が降っている」という発話からもうかがえる。この発話は現象の記述と理解することもできるし、それを体験した人の報告と理解することもできる。認知する主体と認知される客体とは、明確な境界を持って区別し得るわけではないのである。さらに問題点4で述べるように、場合によって認知主体は<場所>化し、認知主体としての機能が焦点化されないことすらある。

Langacker の依拠する単純な主客二元論では、主客にまつわる伝統的な問題を抱え込んでしまう上に、認知プロセスにおいて主客の境界が不明瞭な場合があることや、後に問題点3で論述する認知プロセスの発達・変化も説明できない。これらの点が問題である。

問題点2 一人称のゼロ形は displacement がゼロといってよいのか

次の問題点は、概念化・言語化する主体が言語表現上、明示的に表されない場合の考え方である。Langacker は、本稿において先にみた図5(b)をそのような例とみなしている。つまり、GとG'

および両者の関係がプロファイルされる場合に、Gが自らの位置にとどまって displacement を起こさず自身を知覚対象としないから、概念化・言語化する主体が言語表現上、非明示的になると考えている。しかし、この説明だと人称代名詞以外の言語表現に考察が及ばないのではないだろうか。

池上(1981)は、言語の類型論に関する考察の中で「する」型と「なる」型に分け、両者を比較対照し、文化の特殊性をも論じた。その後も日本語と英語の類型論的分析、比較対照については数多くの研究がなされている。その中で典型的に取り上げられる例のひとつが、

- (6) a. 寒い!
- b. I feel cold!

といった違いである。言うまでもなく、自然な日本語表現である例文(6) aでは一人称がゼロ形になっているのに対し、英語の例文(6) bでは一人称代名詞が表現されている。そして、このような差異は、

- (7) a. 富士山が見える。
- b. I see Mt. Fuji.

という知覚表現の違いや、

- (8) a. あ、割れた!
- b. Oh, I broke it.

という行為表現の違い、

- (9) a. 向こうに猫がいるよ。
- b. I see a cat over there.

という存在表現と知覚表現との違い等とも関係していると考えられる。例文(8)と例文(9)は構文選択から異なっており、一人称のゼロ形を displacement がゼロであることに求めるのは無理があるのではないか。¹⁵

Langacker は一人称のゼロ形を「主語の省略」(Langacker 1985: 138)とも語っているが、まさにその点に彼の考察の限界が示されている。日本語における一人称ゼロ形は、自己を指示する表現が本来あるべき主語位置に明示的に置かれず省略された結果なのでなく、概念化・言語化の段階ですでに自己意識を持たずに事態を把握する構図に基づいていると考えることもできる。この論点は、先にみた池上の主観的把握によっても示されている。池上は、主観的把握をする場合に一人称ゼロ形が用いられると考える。彼の理論によれば、主観的把握において一人称表現はそもそも明示的に使われないのである。池上がよく使う例を挙げれば、道に迷った時、英語圏の話者であれば“Where am I?”と言語表現上、自己を明示した文を発話するのが自然であろうが、日本語の話者は「ここはどこ？」と言語表現上、自己を指示しない文を発話するのが普通である。「ここはどこ？」は、一人称主語が省略されているのではない。そもそも事態把握の仕方が英語話者と日本語話者とで異なっているのである。

「主語の省略」と考える Langacker の発想は、英語を例に使って考察していることから生じるのだ

ろう。英語が<なる>的言語でなく<する>的言語であること、英語話者が<こと>よりは<もの>に焦点を当てる傾向があること等に起因する構文的特徴から発想したように思われる。英語話者は客観的把握を好み、「誰が何をどうする」という要素に注目する傾向があるし、英語が「主語の義務的な明示化という文法的な制約の介入」(池上 2011: 54)を受けることもあるだろう。¹⁶

Langacker の視点構図は英語をモデルとして組み立てられており、言語現象の動機づけをその構図だけで説明しようとする、記述的妥当性は満たしたとしても説明的妥当性に欠ける結果になる。理論の説明能力でいえば、池上の事態把握論の方がこの点で優れているといえるだろう。一人称表現ゼロ形の使用は決して displacement のゼロ化だけで説明すべきものではないのである。

問題点3 概念化・言語化主体を言語表現上、明示するかどうかは単なる共時的対立なのか

Langacker によれば、概念化・言語化する主体を言語表現上、明示するかどうかは displacement をするかどうかに関係する。この説明であれば、この選択は共時的な視点構図の違いに基づくことになる。しかしながら、池上が慎重に指摘する通り、「もし、現時点での言語の進化に関するさまざまな言説が指摘するように、言語の使用が<身体性>に密着した形でのものから、<身体性>とは乖離した形のものへと進化していくのであるとすると、日本語は人間言語としての<始原への近さ>(中略)を今なおかなり豊かに保持している」(池上 2011: 64)点を考慮すると、概念化・言語化する主体を言語表現上、明示しない視点構図から明示する視点構図へ変化するという通時的な対立・変化も考えねばならない。¹⁷

池上はこの論点を Ikegami (2015) の中で明確に主張している。池上は「sad (悲しい)」というような感情表現を例に挙げ、モノログにおいて話者が自らの私的感情を言語化する際、自身を言語表現上、明示することは余分な情報であり不要であろうという。言語表現上、自己を明示する必要が生じるのはダイアログにおいて、なのである。¹⁸ 池上の考えでは、日本語において一人称表現を明示しない傾向にあるのは、話者が主観的把握を好むという理由に加えて、言語共同体のメンバーが文化的・社会的に比較的等質であるという事実によって動機づけられている。話者が自己中心的な存在から社会的な存在へと変わると言語もその目的に叶うように進化する。このような観点から世界の言語をみると進化尺度において異なっているように思える、と池上はいう。「My guess is that Japanese is located lower on the scale than a language like English. It is more distinctly characterized with the speaker's ego-centric orientation on the one hand, and less constrained by grammatical rules as social conventions. (筆者訳: 私が思うに、日本語は英語のような言語に比べて進化尺度の低い段階に位置しているようだ。日本語は自己中心的な方向で明確に特徴づけられる一方で、慣習的な文法規則による制約は薄い。)」(Ikegami 2015: 7) と池上はいう。換言すれば、自己中心的な方向で特徴づけられる日本語は、モノログ的な性格を強く残しており、言語表現上、自己を明示しないことを含めて主観的把握をする傾向を持つし、主語の義務的な明示化という文法的制約も弱い。それに対して英語はダイアログ的な性格を持ち、言語表現上、自己を明示する傾向があるうえに、主語の義務的な明示化という制約もある。そして、この違いは進化尺度の段階の違いであり、日本語の方が進化的には低い、つまり前段階的だと池上は考えているのである。(池上 2006: 201-203 参照)¹⁹

同様の主張を中村 (2009) も行っている。中村は、自らの理論的枠組みを構築し、認知モードを I モードと D モードと呼ばれる 2 種に分ける。I モードとは、「認知主体と対象との主客未分の身体的

インタラクションを基盤とする」(中村 2009: 358) 認知モードであり、一方 D モードとは「認知主体としての私たちが、何らかの対象とインタラクトしながら対象を捉えていること(認知像を構築していること)を忘れて、」(中村 2009: 363)「認知像を客観的存在として信じ込む私たちの認知モード」(中村 2009: 362) のことである。中村は、「D モードが、認知主体とのインタラクションを考慮しない点に注目すると、D モードは脱主体化(desubjectification)の度合の強い認知モードでもある」(中村 2009: 364) と述べ、「このような議論は、I モードと D モードが単に対立する認知モードではなく、I モード認知から D モード認知へと移行することを示唆している」(中村 2009: 364) という。認知の本質は身体的インタラクションに基づく主客未分の状態の I モードであり、これは原初的である。一方、メタ認知的な D モードは主客二元論的であり、I モードの後に発達とともに可能になると中村は主張する。(中村 2009: 365 参照)

心理学の知見を取り入れて自らの哲学的考察を展開したメルロ＝ポンティも、一人称の使用に関して発達・変化の過程のあることを主張している。メルロ＝ポンティは、ギョームの考察を承け、乳幼児の対人関係を検討し、幼児が一人称表現を使えるようになるまでに発達段階を経ることを説明している。幼児は、生後二年目の初めにきわめて多くの人物の名前を覚え、その後生後十六か月目の頃になって自分の名前を覚えるが、「しかしそれを使うのは、最初はきわめて限られた場合だけであって、たとえば「お名前は？」といった質問に答えるときとか、また自分が他の子供と対等に並べられている状況—たとえばお菓子の分配—を名ざす場合だけ」(メルロ＝ポンティ 2001: 105) である。こうした状況で自分の名前を使っても、自己意識を持っている、すなわち他者のパースペクティブと区別される自分特有のパースペクティブを持っているということではない。まだ、この頃の幼児にそのような意識はない。この頃の幼児の言語使用の特徴について、メルロ＝ポンティは以下のような興味深い観察を述べている。

子どもは「私は書きたい」(Je veux écrire)と言おうとするとき、不定法の単語〔＝日本語では終止形があたるだろう〕を主語なしで使います。ギョームによりますと、彼の男の子は、「私は書きたい」と言う代わりに、「書く」(Écrire)と言ったのですが、父については「パパ書く」(Papa écrire)と言っていました。これはつまり、彼は主語が自分以外のものであるときにしか、主語を使わなかったということです。彼は、自分のことが問題となるときには、全然主語を使わなかったのです。(メルロ＝ポンティ 2001: 105)

この頃の幼児が他者については主語を使っても自身を主語にすることがないという特徴は、問題点 2 で論じたように、一人称のゼロ形を主語の省略とみなすよりも、池上のいう主観的把握、中村のいう I モードによる認知を行っているが故の結果と考える方が適切であろう。

この時期を経て、幼児はやがて言語表現上、自己を明示するようになる。しかし、一人称代名詞を使うようになる前に、自分の名前、つまり固有名詞を主語にする時期が先行するという。たとえば、「書く」と言っていた幼児が、「ポール書く」と言うようになり、その後で「私は書く」と言えるようになるのである。

この点は十分に考察せねばならない。まず、固有名詞と人称代名詞との大きな違いを見逃してはならないだろう。固有名詞は自身に与えられた「固有の」符号である。固有名詞によって、他者の中から自身だけを選び出すことができる。固有名詞を使うことができるようになったということは、自身は他者と区別されるその名によって呼ばれることを諒解したということである。言い換えれば、他者

の視点というものの存在、それが自己の視点と区別されるものであるという事実、固有名詞は他者の視点から与えられるものだということを幼児が諒解したということである。しかし、人称代名詞を使うためにはその諒解だけでは十分でない。人称代名詞は固有名詞と異なり、自分が常に同じ名で呼ばれるわけではないことを諒解しなければならないのである。人称代名詞はひとつの世界を形成しており、一人称代名詞は自分だけでなく話者となる誰もが使えること、対話において話者が自分の時に自身は一人称となり、話者が他者に換わった時に自身は二人称となるということ、つまり、人称代名詞の使用には対話における役割を諒解しその役割に基づいて名が交換可能であること、誰にもその使用が開かれていることを諒解しなければならないのである。

長くなるが、メルロ＝ポンティのことばを引用しておく。

「私」なるものが入りこんでくるのは、人々が彼に向かって言う「お前」(tu, toi) が、自分にとっては「私」だということがわかったときです。つまり、「私」という語が使用されるためには、視点というものは相互的なものだという意識がなければならないのです。(メルロ＝ポンティ 2001: 104)

「私」という代名詞は、少なくともその言葉の完全な意味では、つまり相対的な意味の言葉としては、固有名詞よりも後になって現れてきます。「私」という代名詞が本当にその完全な意味をもちうるのは、幼児がそれを自分個人を指す個性的指標として用いるときではなく一つまりまったく彼個人だけを指し、他の誰をも指さない指標として用いるときではなく一、自分の目の前にいるどの人もみなそれぞれに「私」と言うことができるし、その人たちはみな自分自身にとっては「私」であり、他人からみれば「お前」なのだとすることを、幼児が理解したときです。いいかえれば、「私」という代名詞が、そのもちうる一切の意味をこめて習得されるのは、他の人たちから「お前」と呼ばれている彼自身も、やはり「私」と言うことができるようになったときなのです。したがって、幼児が十九ヵ月のころに「私」という言葉を使ったからといって、それで彼が代名詞の用法を習得したと言うことはできません。代名詞の本当の習得があるためには、いろいろな代名詞のあいだのいろいろな関係を把握し、その一つの意味から別の意味に移行しうるのでなければなりません。(中略) もっとも、呼び名の代わりに「私」という代名詞が規則的に使われるのは、二年目の終わりになってからです。これは、呼び名がその人の一つの属性ともいうべきものであるのに対して、代名詞は、それを口にしてしている当人を指すこともあれば、また話しかけられている相手を指すこともあるからです。ただ一つしかない固有名詞が一人一人の人にしかあてはまらないのに対して、同じ代名詞は、いろいろな人を指すのに使われうるものなのです。(メルロ＝ポンティ 2001: 105-107)

私たちの認識は、人称世界諒解以前の非人称の世界²⁰から人称世界諒解以後の世界へと発達・変化する。²¹ 人称世界諒解以前の非人称の世界において、幼児は主観的把握、Iモードの認知を行うのが普通である。人称世界諒解以後の世界になると、主観的把握、Iモードの認知だけでなく、客観的把握、Dモードの認知も行い得る。人称世界諒解以後は、客観的把握、Dモードに移ってしまうのではなく、どちらのスタンスを取ることも可能である。一人称ゼロ形は、人称世界諒解以前にも以後にもみられる現象であり、単なる共時的対立に基づくのみならず、通時的対立をも考慮に入れなければならないのである。

問題点4 Gの〈場所〉化をどのように考えるのか

人間の感覚器官の中では視覚と聴覚に関わるものが他の器官より発達しており、視覚・聴覚を通して得る情報は他の器官から得る情報よりも多い。視覚・聴覚に関する日本語表現の原型は「見る」「聞く」であるが、これらの認知プロセスには2種の概念化・言語化が可能である。池上が適切に表現しているので引用する。

1つは外からの視覚的ないし聴覚的な刺激が感覚器官に到着して感知されているという段階で捉えているもので、この場合には視覚ないし聴覚の営みの主体としての人間は、刺激の〈到着点〉ないしは、刺激の受容される〈場所〉として言語化される。

もう1つは、視覚的ないし聴覚的な注意を意図的に外へ向けて発し、何らかの刺激源を捉えようとするもので、この場合、視覚ないし聴覚の営みの主体としての人間は、他者に働きかける〈動作主〉として言語化されることになる。(池上 2006: 169-170)

これらの区別は日本語の場合「見える／聞こえる」、「見る／聞く」という言語表現に反映されていると考えられる。認知プロセスにおいて「見える」という捉え方をする場合の認知主体は、〈媒体〉もしくは〈場所〉そのものと化していると捉えることが可能である。〈媒体〉というのは、認知主体の意識的支配を超えて何らかの存在が認知主体を〈媒体〉にしてそのようにさせているような場合である。何か大きな力が働くように感じる場合もあるだろうし、閃きのように思える場合もあるだろう。自分の意志でなく、意識しないままに認知プロセスを遂行している時、認知主体は〈媒体〉と化して機能している。それに対して、〈場所〉というのは、認知主体がその環境と一体となり、できごとの出来る場所として機能していて、その場所できごとが起こっている、何かがなるような場合である。先にみた〈環境に埋め込まれた自己〉も一種の〈場所〉と化した自己である。(池上 2007: 334 参照)

認知主体の〈場所〉化について、哲学的な考察もできる。²² 日本語の「見える」や「聞こえる」を使う場合、認知主体は言語表現上、明示されないことが普通である。「島が見える」「水が漏れている音が聞こえる」という日本語の発話の場合、概念化・言語化する主体は通常明示されない。もし明示したとしても「? 私は島が見える」や「? 私は水が漏れる音が聞こえる」という文は不自然に響き、「私には島が見える」「私には水が漏れる音が聞こえる」という表現の方が自然である。²³ 「私には」という表現において「に」という場所を表す助詞が使われることからわかるように、この場合の認知主体は〈場所〉化されていると考えることができる。²⁴ 「見える」や「聞こえる」において、認知主体の機能は〈ある場所を視点として取る〉ことに過ぎず、〈その場所へ移動し、その場所に立つ〉という意味では〈動作主〉として機能するが、〈その場所から何かが見える／聞こえる〉は認知主体にしかできない行為ではなく、その眺望(視覚的風景や聴覚的風景)は認知主体にしかアクセスできないものではない。²⁵ この意味において、認知主体は視点の〈場所〉を示すだけといえる。つまり、「島が見える」や「水の漏れる音が聞こえる」という発話が示しているのは、認知主体のいる〈場所〉に立てば、その視覚的風景や聴覚的風景を認知することができる、ということなのである。²⁶

認知主体の〈場所〉化は、「見える／聞こえる」といった知覚表現に限られるわけではなく、痛みのような感覚表現にもみられる。「なる」型の言語である日本語の場合、「頭が痛い」のように認知主体を言語表現上、明示しない発話はごく自然である。この場合、認知主体自身が〈場所〉となり、そこ

に<痛み>が出来していると考えることができる。「頭が痛い」という発話の場合、「頭という<場所>に痛みが生じている」と考えることもできるが、「私は頭が痛い」という発話も可能であることから、「私という<場所>に頭が痛むようなできごとが出来している」と考えることもできるだろう。「する」型の言語である英語の場合、同様の意味を表現する場合、“I have a headache.”のような構文を用いることが自然であろう。認知主体が<所有者>として<痛み>を所有するという、主客二元論の上に主体の役割を明確にした構文が好まれる。しかしながら、英語の場合、痛みの表明を“Ouch!”と表明することもできる。このような場合は、認知主体が自身を<所有者>として認知しているのではない。いわば叫び声を発することで痛みの生じている身体もしくは認知主体を示しているのである。認知主体は言語表現上、明示されておらず、痛みの出来る<場所>化していると考えられるのではないだろうか。

このような認知主体の<場所>化が日本語に固有な特徴なのではなく普遍的な認知プロセスなのでとすれば、Langackerの構図だと不十分であろう。Langackerの構図においてGはスピーチアクトに参加している者たちであるが、認知プロセスにおける認知主体としての機能は「見る」という行為主体の有り様に置かれ、「見える」場合の認知主体の有り様は考察していない。それ故に認知主体には<動作主>としての役割のみしか与えられておらず不十分であるように思われる。

<場所>としての自己という考え方は、単に視点構図の問題だけでなく、先にみたように「する」型と「なる」型の言語の相違、「もの」に注目するか「こと」に焦点を当てるかの相違といった、もっと広い言語現象とも関連している。視点構図モデルは、それらまで広く含む説明能力を持つべきである。

問題点5 一人称ゼロ形の意味はカジュアル、インフォーマルなのか

一人称ゼロ形は、明示される場合と比べてどのような意味的差異を帯びるのか、もしくは帯びないのか。この点に関してLangackerが挙げている例は以下の通りである。

(10) a. I hope not.

b. Hope not.

(Langacker 1985: 138)

例文(10) aと(10) bとの意味的な違いは微細なものだと言いながらも、両者の違いは形式的か否かの差だとLangackerは考えている。Langackerによれば、(10) aはどのような場面・相手に対しても適切であるのに対し、(10) bはカジュアルでインフォーマルな話しことばに限定される。言語表現上、自身を明示している(10) aの文は、自身を他者と同列に置き、他者の態度を記述するように自身の態度をより客観的に記述する。それに対し、(10) bは、言語表現上、自身を明示化しないことによって聞き手に対して親しみの念をより一層強く喚起し、話者になりきって気持ちを感じるように仕向ける方法であるという。(Langacker 1985: 138 参照)

Langackerは、形式的であることと客観的であることとは相関するとみている。形式的になればなるほど、GやG'といった要素は客観化される。反対に、形式的な程度が下がるほどGやG'といった要素は主観化される。Langackerによれば例文(10) bのように主観化された表現は形式的でなくなるのが当然なのである。

先にみた例文(6)から(9)のそれぞれの例文aにおいて、日本語の母語話者は形式的な低さ、

つまりカジュアルさを感じるだろうか。確かに、文語体ではなく口語体であり、使用する場面や相手はカジュアルな場合に限定されるようにも思われる。しかしながら、一人称ゼロ形のまま、「富士山が見えます」「割れてしまいました」のような表現を使うなら十分に形式的なのではないだろうか。

一人称ゼロ形は、形式性の尺度に応じて選ばれるのではない。一人称を使うか使わないかは、事態把握の違いによって引き起こされるものである。人称世界諒解以前の非人称段階においては一人称ゼロ形がいわば当然の言い方であり、人称世界諒解以後の段階においては、主観的把握をした場合に一人称はゼロ形となり、客観的把握をされた場合に一人称は言語表現上、明示される。日本語の話者のように人称世界諒解以後の段階において主観的把握を好む傾向がある場合、一人称の使用は、他者と並べられた自己、自分以外の人と同列に置かれて客観化・対象化された自己を指示するのである。

従って、「他の人はともかく私は」「他の人は違うかもしれないが私は」という、対比・限定の意味合いを帯びる傾向にある。「富士山が見える」や「知らない」といった日本語の自然な発話に、一人称を明示して入れてみると「私には富士山が見える」や「私は知らない」といった発話になる。後者のペアの意味が対比・限定を帯びることは日本語の母語話者なら違和感なく理解することができるだろう。

問題点 6 役割名称や固有名詞は三人称なのか

Langacker の枠組みを検討する際、上述例文 (3) において、自身を三人称表現で指示する場合を例に挙げた。以下に再掲する。

- (3) a. Don't lie to me!
- b. Don't lie to your mother!

この例において Langacker の説明に間違いはない。では日本語の場合はどうであろうか。この例文ペアを日本語に置き換えてみる。

- (3') a. 私に嘘をつかないで!
- b. お母さんに嘘をつかないで!

一見すると、例文 (3') は英語と同じ対比を示すように思われる。しかし、(3') b の例文は三人称ではないのではなかろうか。この違いを考察するために以下の例文を挙げてみる。

- (11) a. Congratulations! I am proud of you.
- b. Congratulations! Mom is proud of you.

- (12) "May I speak to Mr. X?" "This is he."

例文 (11) において、(11) a は母親が一人称代名詞で自己を指示しているのに対し、(11) b では、Mom という役割名称（親族名称）で自己を指示している。一人称代名詞が自己を指示する無標の形なのに対して、「お母さん」という役割名称で自己を指示する場合は、対話者である子供の目を通して自身を見ていることを示している。この場合、(11) b において be 動詞が is で主語と一致していることからわかるように、Mom は三人称として扱われている。例文 (12) の場合、電話に対応する

人物が自身を指して he を使っている。これも自己を三人称として扱っていることがわかる例である。それに対して、日本語の場合を考えてみる。

- (11') a. おめでとう。あなたを誇りに思うわ。
b. おめでとう。お母さんはあなたを誇りに思うわ。

(12') 「Xさんとお話したいのですがいらっしゃいますか」「ええ、私です」

例文 (11') a は一人称ゼロ形の使用が自然であると思われる。例文 (11') b はどうであろうか。「お母さん」は、先に英語の場合をみたので引き摺られて三人称のように考えてしまうかもしれないが、実は一人称である。「お母さんはあなたを誇りに思うわ」は、「お母さん」を代名詞化した「彼女はあなたを誇りに思うわ」と意味的にまったく異なる。²⁷「お母さん」は言語表現上、自己を指示する一人称として機能しており、例文 (11') b は「私はあなたを誇りに思うわ」とほぼ同意味と考えられる。この論は、例文 (12') において一層明白であろう。英語の例文 (12) の場合、自身を he という三人称代名詞で指示していたが、日本語の例文 (12') の場合、he に当たる「彼」を使うことは一般的には不可能である。自身を指示するのはこの場合、「私」なのである。例には挙げないが、固有名詞を使った場合も同様であろう。英語の場合、自身を固有名詞で指示する時には三人称として文法的に処理されるが、日本語の場合は、一人称代名詞の代わりに役割を果たしていると考えられる。

Langacker は、英語の例を取り上げて、自身を your mom で明示したり、固有名詞で明示したりすることが、オフステージに位置する視座からオンステージの自身を言語化することだと考えた。そして、視座も自身もオンステージに位置する場合に一人称代名詞を使うと考えた。しかし、少なくとも日本語の場合、your mom や固有名詞を使う自己指示は三人称とみなせない。言語により、役割名称、固有名詞は必ずしも三人称とは限らないのである。であれば、オンステージ、オフステージという理論的装置を用意して違いを表そうとする視点構図は普遍性を持たないであろう。

問題点 7 再帰代名詞を考察すべきではないか

Langacker の視点構図によれば、自身への指示は以下の通りであった。第一に、G と O が一致している時に一人称代名詞が使われる。第二に、G がオフステージに位置する G' という視座から G 自身を眺めると三人称表現が使われる。第三に、G がオンステージに位置する G' という視座から G 自身を眺めると一人称代名詞が使われる。以上の考察において再帰代名詞への言及はない。しかしながら、再帰代名詞は紛れもなく自己に言及する表現である。〈動作主〉たる自身が、自己を対象として行為を行う時、対象化された自己を再帰代名詞によって表現する。再帰代名詞は Langacker の視点構図においてどう表されるべきだったのだろうか。

再帰代名詞は、自己を他者化した時の表現だと一般的にみなされている。しかし、厳密に言えば、主語が I の時に myself を使うのであるから三人称表現を使用する意味での他者化とは異なる。myself の捉え方が me と同様だとすれば、G' がオンステージに位置していながら G を眺めていることになろう。つまり、G はオンステージに位置しており、自身を示すもうひとつの G2 もオンステージに位置している。G と G2 は関係性をもって結ばれている。そして、G はオンステージ上の G' に視座を移し、G と G2 およびその関係性をプロファイルすることになる。この視点構図において、G2 が me

で指示されるか、my+名詞で指示されるか、myselfで指示されるかの違いは出せないであろう。²⁸

さらに、英語なら再帰代名詞を使う場面で日本語では身体の一部を指す表現を使うという言語的差異もある。(池上 2006: 167-169 参照) この現象は、たとえば以下の例と平行であるように考えられる。

- (13) a. ein Buch lesen
b. in einem Buch lesen²⁹

例文 (13) a と (13) b との違いは、lesen「読む」の目的語が ein Buch という名詞句で示されるか、in einem Buch という前置詞句で示されるかである。例文 (13) a は「本を読む」という無標の意味を表すが、<中に>を示す in が付く b の場合、本を部分的に読むという意味になるという。(池上 2007: 215-216 参照) 例文 (13) b の in einem Buch は<場所>化されている点が重要である。<場所>化と部分化は、相同的な特徴なのである。³⁰ 日本語の主体が<場所>化されているのだとすれば、再帰代名詞を使うのでなく、その身体の一部を指示する表現を用いるのも十分に動機づけがあると考えられるだろう。

もう一点付け加えておく。日本語は英語ほど再帰代名詞の用法を発達させていないが、「自分」「自己」「自身」といった表現を使えば再帰代名詞的な意味を表すことができる。そして忘れてならないのは、関西圏において、「自分」は一人称の再帰代名詞として使われるだけでなく、二人称の呼びかけ表現としても使われるということである。単に自らを他者化するばかりか、他者を視座とし、他者が他者自身を客観化して自己を捉える表現を対話相手が呼びかけに使うという複合的な構造を示す例を Langacker の視点構図ではうまく説明できないと思われる。

おわりに

これまで Langacker の視点構図の問題点を検討してきた。その中で、池上の事態把握論、中村の認知モード論を紹介し、それらに依拠して Langacker の理論モデルの問題点を指摘した。Langacker の理論に問題がある理由のひとつとして、Langacker の視点構図は英語を主な考察対象としているため、ある種の限界を持っており、日本語と英語、またそれ以外の言語をも視野に入れる池上や中村の理論の方が高い説明的妥当性を持っていることを副次的に示し得たと考える。また、別の理由もある。たとえば、自己の鏡像認知はどうだろうか。視点構図としては cross-world identification と同じであるが、自己の鏡像認知は G が G' を眺めるだけではない。G は G' も現実の自分だと思っている。このような認識は Langacker の視点構図では説明できない。

しかしながら、池上や中村の理論的枠組みも十分とはいえない。それは、実は<場所>としての主体の問題と関わり合っている。「私は私である」という発話は、<私>を言語表現上、「私」という主格と「私」という対格で明示した表現である。³¹ しかし、このような「私」という一人称は三人称と置き換え可能である。構文的には、「私は井原である」と対格を三人称で置き換えても、「彼はウィトゲンシュタインである」と主格と対格を三人称で置き換えても変わらない。つまり、「私」という主格と対格は、他者と同列に並べられた表現であり、本稿でメルロ＝ポンティの考えを述べた際の表現を使えば人称世界諒解以後の<私>を指示する表現である。しかしながら、<私>の存在はこれで尽きるのだろうか。かけがえのない<私>、他の誰でもない<私>、独我論的な発想につながる実存的なくこの私>という存在、そしてそのような個別特殊性を有しながら同時に普遍的なくひと>とつ

ながっている〈私〉という存在、「私」からはみ出してしまうそのような〈私〉の存在を実感として誰もが持っているのではないだろうか。

このような〈私〉は、主格と対格で表される「私」という言語表現ではどうしても言い表すことができないだろう。〈私〉を「私」で指示し主格と対格で明示する時、〈私〉は否が応にも人称世界の中に取り込まれてしまい、人称的な存在として諒解されてしまう。人称的な存在からはみ出る〈私〉は対象化された「私」では決してないから、対格としての「私」ではあり得ない。では、対象化する「私」、主格として捉えられた「私」は〈私〉といえるだろうか。否、「私は私である」において、目的格の「私」ばかりか、本稿を通して述べてきたように、主格の「私」も対象化された「私」なのであって決して対象化する〈私〉ではない。このように述べると、「そのような意味ではない」という反論が考えられる。つまり、主格の「私」も対格の「私」も対象化されているが、そのような対象化をする〈私〉、Langacker の表現を使うならオフステージに位置して眺める〈私〉がいるはずであり、それこそが〈私〉なのではないか、と。

対象化する〈私〉が〈私〉を言い当てているという考え方を信奉する人は、対象化・客観化から常に逃げ去り、対象化・客観化する主体が必ず存在すると考える。対象化する〈私〉は、メタレベルの〈私〉である。対象化する〈私〉が一段メタ段階を昇れば、今掴まえていた〈私〉は途端に対象化された「私」へと化す。対象化する〈私〉は、いつでも対象化された「私」へ変わっていく。対象化する〈私〉のメタレベルへの上昇には終わりが無い。つまり、どこまで行っても〈私〉は掴めず、メタレベルにおいて理論的に要請される仮構的存在として在り続けるのみである。

筆者の考えでは、このような対象化する〈私〉は、実存的かつ普遍性へとつながる〈私〉ではない。実存的かつ普遍性へとつながる〈私〉を、永遠に上層へ昇り続けて見出そうとするのではなく、根柢に下がり、下から支えている岩盤のような大地において見出すこと、これが大事なのである。

根柢にあり、下から支えている岩盤のような大地とは何か。それは〈場所〉である。ここで考えたのは、「私」の与格である。「私は私である」だけでは、実は不十分なのであり、〈私〉を見出すヒントは、「私は私に（おいて）私である」という表現にある。³² この文もまた言語化されている限りは人称世界諒解以後に取り込まれているのだが、この「私に（おいて）」は「私は私である」を成立させる〈場所〉なのである。この「私に（おいて）」は「彼は彼に（おいて）ウィトゲンシュタインである」という場合の「彼に（おいて）」とは同列に並ばない。「私は私に（おいて）私である」という時の「私に（おいて）」は、「彼は彼に（おいて）ウィトゲンシュタインである」という事実をも成立させる場所である。つまり、「私に（おいて）、彼は彼に（おいて）ウィトゲンシュタインである」ということなのであり、「私に（おいて）」は「彼は彼に（おいて）ウィトゲンシュタインである」を一階層下で、根柢において支えているのである。

「私に（おいて）」における〈私〉は、私という生命存在なくしては顕れないという意味で〈この私〉であり、生命が特殊個別存在から普遍性へとつながっている如く、人称世界諒解以前の非人称的な〈ひと〉につながっている。〈私〉は、人称化以前の存在として非人称的な〈ひと〉であると同時に、他の人称と並ばない絶対的な〈私〉でもある。非人称性と絶対的な私性とが表裏一体に結びついている存在なのである。人称世界諒解以前の非人称的な、主客未分の〈ひと〉とは、人称世界諒解以前の絶対的な私性である〈私〉、他の人称と同列に並ばない〈私〉、相対的でなく絶対的な〈私〉、言語化すると同時に掴まえられなくなってしまった、言語を身につける以前に諒解していた〈私〉のこと

であり、根柢にあって岩盤のように「私」を支えている<私>なのである。³³

このような根源的存在たる<私>については、池上や中村の理論でも射程が及ばない。それはもちろん彼らが人称世界諒解以後の「私」と<私>だけを考察しているからであり、言語を使った理論と分析をもって対象化・客観化したものを研究対象としているからである。けれども、「私」という一人称探究の道の先には、人称世界諒解以前の<ひと>かつ<私>が待っていて、ことばやことばによる分節、理論的分析を寄せ付けなくとも、たとえ直観的にでも考察しなければならないように思う。ウィトゲンシュタインが終生考え続けた「私」はそのような<私>だったと思うし、それに近づこうとした先達も少なくなかったと信じる。この先の考察は稿を改めて進めていく。

謝辞

本稿における図は Langacker (1985) から採った。掲載を許諾してくださった著者と出版社に感謝申し上げます。Langacker (1985) の書誌情報は参考文献にある通り。また、以下の URL 参照。

<https://www.benjamins.com/#catalog/books/tsl.6/main>

註

- 1 「主観性」は認知言語学における専門用語である。Langacker による説明は以下の通り。(Langacker 1985: 109) “Subjectivity pertains to the observer role in viewing situations where the observer/ observed asymmetry is maximized.” (筆者訳: 主観性は、状況を眺める際の観察者の役割に関係する。観察する者と観察されるものとの非対称性が最大になる時、主観性は最大になる。) 観察する者が観察されるものとならない時、観察者は最大に主観化される。
- 2 ここでは、観察されるものは「対象」(things) である。後に、観察されるものとして「関係」(relations) を述べる。
- 3 出典: Langacker (1985: 121) Figure 3
- 4 Langacker による「意味」の定義は以下の通り。(Langacker 1985: 110) “Meaning is not determined in any direct way by objective reality - instead it is a matter of how we construe or structure a situation in our cognitive representation of it. Moreover, the same conceived situation can be described by numerous alternative expressions each of which embodies a distinct image.” (筆者意訳: 意味は、客観的現実によって直接決定されるものではない。直接的でないということは人間が介在するということである。意味は、私たちが状況をどのように把握し、構造化して、どのように表示するかという問題である。さらに、認知された同一の状況であっても、様々な別の表現によって記述されるのであって、そのどれもが明確なイメージを具現化している。)
- 5 出典: Langacker (1985: 125) Figure 4
- 6 出典: Langacker (1985: 128) Figure 5
- 7 Langacker が述べている通り、これらの例文における displacement の動機づけは愛情や連帯感にあると考えられる。愛着を表現するために子供の視座に視点を移すのである。(Langacker 1985: 128 参照)
- 8 出典: Langacker (1985: 134) Figure 8
- 9 Langacker の本論にある同図のひとつの視点構図に関しては本稿と関係ないので触れない。
- 10 出典: Langacker (1985: 143) Figure 9
- 11 主客二元論の論駁についてはさまざまな研究者や研究書を挙げることができようが、ここでは特に大森荘蔵の名前を挙げておく。

- 12 中村は「主客未分」という用語を使うが、「主客未分から主客対峙への変化」という発達プロセスを踏まえた「主客対峙以前」の意味で使っているのではないと考えられる。それよりも、主体と客体がそれぞれ明確な輪郭を持って対峙するのではなく、主客の境界が曖昧である点を「主客未分」と呼ぶと考えられる。
- 13 事態把握とは、概念化・言語化する主体が状況のどの部分に注目しどの部分を背景にするか、どの部分を言語化しどの部分をしないか、どのような表現を選んで言語化するか、という認知プロセスのことである。
- 14 池上が述べている通り、2種の事態把握は類型的図式で対立するが、この差は二分法的ではなく「勾配的な差（つまり、程度の差）として捉えられるべき」（池上 2011: 51）であるという点に注意しておく。
- 15 言語類型論的に日本語と英語を比較し、一人称代名詞を使用するかゼロ形とするかの違いを説明する枠組みとしては、池上が提唱する「主観的把握」と「客観的把握」の方が記述的妥当性・説明的妥当性のいずれも高く、より優れている。
- 16 Langacker の理論におけるオンステージ、オフステージは英語をモデルとすることから必要とされる装置であると池上は指摘している。（池上 2011: 54 参照）
- 17 池上（1981: 290-291）も参照。
- 18 池上也気づいているように、文化的・社会的に等質な共同体メンバーが対話相手だとしたら、ダイアログであっても自己を明示する必要は生じないかもしれない。（池上 2015: 7 参照）
- 19 同様の主張は池上の著作の多くにみられるが、特に池上（2007: 333）も参照のこと。
- 20 非人称の世界は、ある意味で、他の人称が並び立たない（つまり相対的でない）超一人称（絶対的一人称）の世界であるともいえる。この論点は本稿の「おわりに」で触れる。
- 21 代名詞の獲得については Loveland（1984）も参照のこと。
- 22 ここでは、西田幾多郎の場所論には言及しない。
- 23 その伝えるニュアンスは、次の問題点5で述べるように異なってしまう。
- 24 本稿に関係するのは「（誰かには）何かが見える／聞こえる」という構文である。「見える／聞こえる」には「何かに見える／聞こえる」という構文もある。この構文は知覚報告ではなくアスペクト報告であると考えられる。この論点に関しては本稿では触れない。
- 25 この論点に関しては野矢（2016）を参照のこと。
- 26 知覚能力の個人差について、ここでは考慮していない。
- 27 日本語がこなれていないという点は措いておく。
- 28 たとえば、“I’ll make me a world” というテレビのミニドラマや “I’ll have me a coffee with six sugars” という歌のタイトルなどの me や “I’ll wash my hand”, “I cut myself” の my+名詞や myself という用法を念頭に置いている。
- 29 例は池上（2007: 215）に拠った。
- 30 <場所>化することで、全体の輪郭が不明瞭になる（全体を俯瞰しにくくなる）からかもしれないし、メトニミー的認知が働くからかもしれない。
- 31 類似した例を西田幾多郎の自覚論を基に永井が展開している。永井（2006: 50-51）を参照のこと。
- 32 この議論は、ウィトゲンシュタイン的、永井均的、西田幾多郎的である。
- 33 主客未分の存在が<私>かつ<ひと>であるという考え方は、阿頼耶識（阿頼耶の語源は場所の意）、真如、無相、アートマン、道という語で語られてきた存在とも近いであろう。人称世界諒解以前の非人称的存在は普遍的な<ひと>として捉えられることが多い。しかし、中にはこの存在を<ひと>かつ絶対的・実存的<私>と直観する人もいる。ウィトゲンシュタインは間違いなくその一人である。言語表現において英語の “A star is visible.” は<ひと>的な一般的意味しか持たないのに比し、日本語の「星が見える」は一般的意味だけでなく<私>の意味も含んでいる。この差異が根柢の<ひと>かつ<私>と関係しているように思える。今後考察していく。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』 NHK ブックス 1066 日本放送出版協会
- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』 ちくま学芸文庫 筑摩書房
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」 澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』 ひつじ書房 pp. 49-67
- IKEGAMI, Yoshihiko (2015) “‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’: A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation” 日本認知言語学会 (編) 認知言語学研究 第1巻 開拓社 pp. 1-21
- 永井均 (2006) 『西田幾多郎 <絶対無>とは何か』 日本放送出版協会
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) 『「内」と「外」の言語学』 開拓社 pp. 353-393
- 野村益寛 (2011) 「認知文法における主観性構図の検討」 Conference Handbook 29 北海道大学 pp. 229-234
- 野矢茂樹 (2016) 『心という難問』 講談社
- 宮崎清孝・上野直樹 (編) (2008) 『コレクション認知科学 3 視点』 新装版 東京大学出版会
- モーリス・メルロ＝ポンティ (2001) 『メルロ＝ポンティ・コレクション 3 幼児の対人関係』 木田元 (編訳) 滝浦静雄 (訳) みすず書房
- Langacker, Ronald W. (1985) “Observations and Speculations on Subjectivity” John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax* John Benjamins pp. 109-150
- Loveland, Katherine A. (1984) “Learning about points of view: spatial perspective and the acquisition of ‘I/you’” *Journal of Child Language* 11 pp. 535-556

(いはら ともあき 英語コミュニケーション学科)